

認定心理士の会から

同じ方向を向いた活動を目指して

2016年4月に「認定心理士の会」がスタートして、本稿執筆時点で半年が過ぎました。発足から1年も満たない会ですが、数多くのイベントを開催し、とてもアクティブに活動しています。認定心理士の会は、今後の発展が予想される好スタートを切りました。

会のスタートにあたり、2015年末に、まず幹事会が発足しました。会員の方々のニーズが見えない中でスタートした幹事会の活動でしたが、イベントに参加して会員の方々と直接お話しする中で、そして各イベントで参加者にご協力いただいてアンケート調査を重ねる中で、各幹事は認定心理士の会の会員の方々の顔がだんだんと見えてくるのを実感しました。

会員の方々のことがわかるにつれて、きちんと会員の方々の方向を向いて活動しなくてはならないという思いを各幹事は強く持ちました。

ですが最近、「会員の方々の方向」を向くのではなく、「会員の方々と同じ方向」を向かなくてはいけないのではないかという思いも一方で強く持ち始めています。

本会の発起人である佐藤隆夫先生（学術担当常務理事）は、「この会を利用して、認定心理士間のネットワークを作っていただき、その繋がりを軸に様々な活動を展開していただけたら」という思いをもって、本会をスタートさせました。ですので、今後のイベントは、幹事会を中心に企画、運営されるものではなく、認定心理士の会の会員の方々が主体的に企画、運営できるようにしていきたいと考えています。そして幹事会はそのお手伝いにまわれるような会の運営を展開できればと思います。会員の方々と同じ方向を向いた活動を目指して、認定心理士の会は今後もますますアクティブに活動していきます。

（認定心理士の会幹事 高瀬堅吉）

若手の会から

学会を超えた若手のつながり

2016年の夏、若手の会の代表として国内外二つの学会の企画に参加する機会に恵まれました。今回はその参加レポートです。

一つは、8月19日に韓国・郡山市で開催された韓国心理学会年大会のシンポジウムです。毎年、日中韓の心理学会持ち回りで、年次大会において3カ国シンポジウムが開催されています。今回は「Life and Future of the Young Generation」というテーマで、各国から2名ずつ計6名の発表者が登壇しました。日本心理学会からは小川が最近の日本の心理系の大学院生や若手心理学者を取り巻く状況（大学の教育プログラム改革や国際化、キャリアパスの多様性等）に関する発表を、鈴木が若手の育成に関する日本心理学会若手の会の取り組みやICP2016 Emerging Psychologists' Programの取り組みを紹介しました。準備段階の調整、前日のレセプション、当日のランチやレセプションと、シ

ンポジウム以外にも多くの時間を共有することで、参加者間に強い連携が生まれました。今回の機会は、日中韓における異分野の若手心理学者の繋がりを作る良い足がかりになりました。

もう一つは、9月6日に東京農工大学で開催された日本ヒューマンインタフェース学会のワークショップです。「真剣WAKATEしゃべり場」というワークショップに、ヒューマンインタフェース学会、日本顔学会、日本心理学会の各若手の会の代表計8名が集まり、設立経緯や活動内容、課題や悩みをざっくばらんに話し合いました。テーマや活動は3団体で多様でしたが、若手の力を活かして新しいことや面白いことをする、若手のプレゼンスを高める、そして学術を社会に還元するといった姿勢は共通するものだと実感しました。また準備段階から何回もネット会議を行うことは、分野を超えた連携の第一歩になりました。国や分野を超えた若手のつながりに気づかされ、励まされた夏でした。

（若手の会代表幹事 小川健二・鈴木華子）